
黒谷菜緒の混乱 暴走

雪夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒谷菜緒の混乱 暴走

【コード】

N9815X

【作者名】

雪夢

【あらすじ】

涼宮ハルヒシリーズの世界に行ってしまった、とある腐女子な女の子のお話。

はじまり

今から話すのは、ついさっきの出来事。

出来れば信じて欲しいんだけど、えっと“異世界に落ちました”

俗にいう、トリップって感じのやつ。

異世界って何処かというと、二次元。

もっというと、“涼宮ハルヒシリーズ”の世界だと思う。

何故わかったかと言うと

今、自分は高校の前に居るからであり、キョンを見たからであるってことだ……

どうしよう

来たのは嬉しい、だけどね

どうしてよー!?

え、なに。

高校に入れと!?

自分はまだ中学生なのに．．

あ、紹介遅れました

黒谷 菜緒、中学生です

三次元に住んでました

涼宮ハルヒシリーズが好きです

と、まあこんなもんにしておいて、本能赴くままに行ってみるか!

高校潜入！

どうも、ただいま高校に侵入してます。

黒谷菜緒です

幸い、ハルヒの制服持ってたんで、それを着ています。

秋です、冬に近い。

寒いですが、とても。

どうするか、自分。

勢いで侵入したはいいものの、今は何時とかが今日は何日とか、全くわからないですよ!？

と、とりあえずトイレに隠れようかな・・・

黒谷 in・トイレットー!)

ふう．．。

さって、これからどうするか考えるか。

ここは二次元、つまりやり直しが利く世界！

勢いに任せて転校設定で行ってみようかな、よし！

黒谷 in 職員室

「失礼します、今日転校してくることになった黒谷菜緒です。」

二次元だとこんな勇氣無いらね、うん。

「ああ、例の転校生ね。微妙な時間だけど、教室に行ってみましようか。」

「は、はい。」

二次元最高（P）

「あなたは、1年・・・」

「確か、1年5組でした。」

「じゃあ、同じね。」

「入ったら自己紹介したほうがいいですか？」

「ええ、そうね。じゃあ、中まで一緒に入ります。」

「わかりました、ありがとうございます。」

二次元って最高だな！

ガラガラガラ

ドアが開いて視線が突き刺さる。
うう、居たたまれないよ・・・

「ええ、今日から皆さんと一緒に生活する転校生です。」

「黒谷 菜緒です。 宜しく願いします」

「ここはやっぱり無難にいておれよう．．．

そして、これから暴走が始まる。
そんなことは、誰にもわからなかった。
そう、誰にも．．

御近づきに

そして、教室に来てから最初の休み時間。

僕はあらかじめキヨンに宛てた手紙を書いておいたのだ！

それをキヨンに渡すという重大作業が

思い切って言ってみよう！

「あ、あの！ これ・・・」

「手紙・・・？」

「まさか、ラブレター！？」

近くにいた谷口がはやし立てる。

「ち、違います！ あの、それ、極秘ですから！」

ああー、恥ずかし過ぎて走って席に帰って来ちゃったよ・・・

ちなみに手紙の内容は、

☐ キヨンさんへ

どうも、はじめまして。

いきなりですが、私は

異次元から来たんです

キヨンさんなら理解して

いただけますか？

私は三次元から来ました

三次元では、この世界は

二次元とって、アニメやラノベ

として有名です。

私は、この話が大好きで

ずっと夢みてたら、

二次元に来ていました

キヨンさんしか話せる人が
いないと思って書きました

返事ください。

放課後、文芸部室に行きます

SOS団に入団しに。

☐

こんな感じだ。

キヨンの顔をうかがうと、いろんな感情がいきりまじっているのか、自分が読み取るのが下手なのか
なんとも言えない表情だった

あ、ノート1ページ破ってペンを走らせてる。

返事かなあ。

そして、キヨンはいきなり立ち上がってこちらに近付いてきた

「昼休み、時間あるか？」

「あ、たぶん。」

「まだ把握しきれてないが、とりあえず訳ありなんだろう？
古泉、長門を呼んで話し合わないか きつと長門なら力になるぞ」

「はいっ。ありがとうございます」

「これ、返事な。あ、あと敬語じゃ無くていいぞ。」

「ありがとう、キョンくん」

「呼び方・・・まあいいか。
宜しくな、黒谷」

「菜緒でいい。」

「そうか？ 宜しくな、菜緒」

「「ちら」ぞー！」

なんでこんなに話が出るのかというと、ハルヒが教室にいないからであって。

国木田と谷口は何か話してるみたいだけど、よくわからない

にしても、かっこいいなあ

友達なれるかなあ

時は昼休み

誰も来ないような、部室棟の一室

文芸部室に僕は来ていた。

そこには、キョンくん、長門ちゃん、古泉くんがいる

いま、事情を説明し終わったところである

「・・・と、いうわけです。」

僕がそういうと、古泉くんは微笑みを崩さないまま、腕を組んで何やら考え始めた

「それは、困りましたね。

僕としては彼女の意思次第で行き先は変わると思いますがよ。」

「長門、お前はどつだ？」

「次元と次元の間で何らかの衝撃波が感知された。その衝撃波により少しの間だけ次元同士の間が歪んだ。しかし、今は歪みは感知されない。」

歪みが出来ないと、あなたは帰れない。」

「つまり、僕は歪みがおこらないと帰れないんですね。」

「そう。歪みは滅多におこらない。次はいつおこるかもわからない。」

「お前が歪みをつくりだせないのか？」

キョンくんがたずねる。

「つくりだせる。」

しかし、つくりだしたら次元が崩壊して世界が無くなるかもわからない。」

「そうなんですか。」

でも、大丈夫です、僕元の世界に帰りたく無いんで．．」

「何か事情があるみたいですね。」

いえ、深く探りはしませんよ。」

出来れば聞かせていただきたいものですが」

「え．．じゃあ、今度気が向いたら。」

今は話したく無かったから、てきとうな事をいつておいた。

「しばらく帰れないんだよな。家は．．あるわけねえよな。」

「はい、無いです．．。」

「おや、なら僕の家に来ませんか？」

「やめる古泉、いきなり冗談言ってる場合じゃ無いぞ。」

「おや、僕は本気だったのですが。」

「あ、あの。僕、何かとキヨンくんの家に住候させていただきました
いんですが．．ああ、すみません。気にしないでください」

「俺んちか？」

まあ、俺はいいけど親がな．．聞いてみるから待ってる」

「は、はい！」

「良かったですね、黒谷さん」

「古泉くん。」

菜緒でいいです、むしろ菜緒って呼んでください」

「頼まれては仕方がないですね。では、菜緒さんって呼びますよ」

「ありがとう、古泉くん！」

「いえ、礼には及びません。」

「あ、ねね。長門ちゃん、お友達になってください」

いきなりそう言つと、長門ちゃんは少し顔をあげた

「・・・私？」

「うん！ お願いします」

「・・・別にいい」

長門ちゃんに関わりの無い人なら、この反応は断ったように見えるかも知れないけど、これはいいよって言う意味であり、

「ありがとう、じゃあ、有希って呼んでもいいかな？」

動いたかわからないような角度でうなづく。

「じゃあ、菜緒って呼んでねー！」

なんで皆に名前でもらいたいのかと言うと、願望だったからと、親しくなりたかったから

そんなこんなでキョンくんが帰ってきて

「大丈夫だと」

「じゃあ、お願いします」

「ああ、じゃあそろそろ解散するか」

そして、僕は友達をゲットした！

友達なれるかなあ（後書き）

自分のいつもの癖、
ぼんぼん進んでしまう癖が発動中です

この癖なおさないと・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9815x/>

黒谷菜緒の混乱 暴走

2011年11月5日02時09分発行